

一、蔵書印を調べる意義

書物は、1) 書かれた内容（テキスト）、2) 本という形態（モノ）、3) 受容の歴史、の3つの要素で成り立っています。書誌学は、主に2) について正確な記述を行うための方法で、それは1) を詳しく検討するための前提となるものですが、多くの場合3) についての記述も同時に行っています。それによって、その書物が各時代の文学や学問にどのような影響を与えたかを知る手がかりを提供することができ、文学史あるいは学芸史の研究に大きく貢献できるのです。

3) に関する書誌学的記述のなかで、重要な要素は蔵書印と書き入れでしょう。この二つは多くの場合連動しているため、蔵書印を調べることは書き入れをした人物の特定にも役立ちますし、たとえ人物の特定はできなくても、時代や地域が大まかにわかるだけでも意義があるでしょう。

なお、3) を中心に考えた場合、日本古典籍の範囲は、日本人がかつて所有していた書籍全体に及ぶこととなります。特に漢籍および朝鮮本は、長い受容の歴史があり、日本の書物文化を考える上で絶対に欠かせないものですが、現在の図書館においては管理上いわゆる和本と区別され、目録も別々に作られる事が多いのは問題です。日本古典籍を扱う司書・研究者は、3) の視点から、漢籍及び朝鮮本（場合によっては洋書）にも興味を向けてもらいたいと思います。

さて、3) の視点は、2) の記述を正確なものにするのにも役立ちます。すなわち、最初の受容者が特定できれば、その書物の成立の下限が確定するのです。日本においては、江戸時代の初期、社会の安定にともなって、知識人や支配層に蔵書家が多く出ました。この時期の蔵書印を持つ書物は、漢籍でいえば明版（みんぱん）以前、和本の写本でいえば江戸初期までの書写、版本でも五山版・古活字版あるいはごく初期の整版であり、いずれにしろ貴重書として扱われるべきものです。さらにこのことは1) にも関わってきます。特に写本においては、書承関係を知ることが重要ですが、この時期の古典の写本は、公家を中心とした王朝以来の文化を継承する家に伝来した純良な本文を伝えるものが多く、信頼できる本文を持つ可能性が高いのです。

すなわち、3) についての正確・詳細な記述ができれば、それは1) をも包含した、その書物全体の性格を明らかにすることに多大の貢献をする、というわけです。

連綿と続いている文庫はいざ知らず、いやそういう所であっても、書物は集散を繰り返していきます。その書物が元々何処にあったのか、どういった書物群の中の一点として作られ、読まれたのか。あるいはその書物群がどのように形成されたのか。こういった研究にとっても、蔵書印の正確な記述が大きな威力を発揮するのです。

近年は海外に出て行った日本の古典籍に注目する研究者が多くなりましたが、和本ではなく、漢籍の場合、通常目録では中国から直接移動したのか、日本を経由して移動したのかがわかりません。蔵書印の記述があれば、かつて日本にいつ頃まであったものかが推測できます。それによって、日本における書物の受容や流通の歴史について新たな知見が得られることになるのです。

二、蔵書印の魅力と難しさ

古来中国では書を芸術の重要な一分野としてきましたが、書は決して筆で書かれるだけでなく、金属や石、あるいは土（陶製品）などに刻まれて残っています。印も同様の長い歴史を持ちます。特に印は所有者の権利や権威を示す重要な役割を担っているため、注意深く、最高の技術をもって制作されてきました。それだけに、美術的な価値も高いのです。そのような文化を受容した日本においても事情は同じです。特に江戸時代以降は古代文字の研究の進展と新しい流派の発生などがあり、発展しました。

なお、最初の統一王朝である秦が制定した篆書という書体が、碑文や書籍などの主流から姿を消した後、「篆刻」の名の通り、印の世界では命脈を保ってきたのは、権威を示すという印の役割に由来するものでしょう。

さらに、印の多くは朱あるいは赤色です。墨一色の書の作品に作者の落款印がアクセントとなるのと同様の視覚的効果を書物の上に生み出します。

問題は、なかなか読めないということです。篆書体は、古い象形文字の形を残している書体ですので、日頃見慣れている楷書体からの類推では読み解けない文字が多く出てきます。したがって、ある程度の訓練と慣れが必要になります。これはくずし字を読むための訓練と似ていて、いくつかのパターンを頭に入れ、それを適宜組み合わせることで、またよく使われる文字があるので、そこから前後を推測すること（文脈を読む）などが必要です。まずは「蔵」「印」「書」などの文字や、よく出てくる部首の形を覚えることが大事です。辞典類は形から引けるものがあるのですが、くずし字同様、正解に行き当たることはなかなかありません。部首を覚えておけば、漢和辞典式排列の辞書が使えます。こちらは用例が豊富で、似たような字も近くに並んでいますから、正解を探しやすいでしょう。

ただし、篆刻は限られたスペースに文字を配置するために、部首の移動や変形、字画の省略や逆に延長など、本来の書体（秦代あるいはそれ以前の金石文に記された文字）を逸脱した文字も用いるので注意が必要です。篆刻専用の辞典であれば、そういったものも挙がっていますし、よく知られている蔵書印や遊印（好きな言葉などを彫った印。揮毫のときなどに用いる）の図録を日頃からみておくことも訓練になります。

三、蔵書印の書誌的記述に関する注意点

A 位置

- *表紙・見返し・冊首・巻首・冊尾のいずれかがほとんど。（稀に途中に隠し印あり）
- *表紙の場合、右肩・右下・題簽内など。
- *冊首・巻首の場合、切り取りを恐れて文字にかかるように捺す人、文字を避ける人がいて、所蔵者の好みや主義が表れる。
- *冊首・巻首には、複数の印がある場合がある。印の色によって、同一所蔵者が複数捺しているのか、複数の所蔵者のものか判断できる場合がある。
- *複数の所蔵者が捺している場合、多くは下から上へと所蔵が新しくなっていくが、もちろん例外は多い。
- *複数の位置をセットにして捺す所蔵者もいるので見落とさないこと。（金沢文庫・小津桂窓・脇坂安元など）
- *冊の途中の巻首尾に印がある場合、押捺後の改装（合冊）を示唆するもの。

- *蔵書票とセットになっていることもある。（小津桂窓・平出鏗二郎など）
- *表見返の魁星印・蔵版印、序跋の落款印、刊記の版元印・売出印などは、刊行時あるいは販売時に既に実捺されているものなので、蔵書印と間違えないこと。
- *裏表紙左下の見返紙の裏に小さな印や書き入れがあることがある。これらは、その本を扱った古本屋の心覚え。場合によっては記述の対象としてよいか。

B 色

- *朱あるいはそれより濃い赤が多い。まとめて「朱」としてよい。
- *寺院・僧侶には黒が多い。（彭叔守仙の「善慧軒」など）
- *朱以外の色の印は凶事あるいは諒闇（天皇の死去に伴う服喪期間）のときに用いるという説もあり、実際に学習院の蔵書には、大正元年～三年受け入れの書籍には黒印が用いられている（学習院大学東洋文化研究所編『知識は東アジアの海を渡った一学習院大学コレクションの世界』丸善プラネット、2010年）。また、蔵書の種類による使い分けがあり、相見香雨は珍書に緑印を用いたと言われ、脇坂安元は漢文書に朱、和文書に緑を用いているようである。
- *朱色の鮮やかさは印泥の質による。（三井家のは上質らしく、実に鮮やかである）

C 陰陽

- *陰刻（字が白抜きになる…白文とも）と陽刻（字に色が付く…朱文とも）とがある。（なお、封泥の場合陰陽が逆転して紛らわしいから、陰陽の語は避けるべきだとも言う）

D 大きさと形

- *公的機関・寺院・大名家などは大きい方印（正方形の印）・または長方印が多い。
- *方印・長方印・円印・俵型印・楕円印のほか、菱形（田村建頭「芸叢（うんそう）」）・瓢箪型（彰考館）・鼎型（壺印とも）などがある。鼎型は室町から江戸初期にかけて禅僧や学者に多いが、これは揮毫の際などに用いる落款印を蔵書印としても用いたものであろう。（英甫永雄など）
- *枠も、本の匡郭同様単枠・双枠がある。
- *黒の円印あるいは長方印で、地名や屋号が入っているものは、貸本屋の印である可能性が高い。通俗的な版本に限らず、比較的高尚なもの、美しい写本などにも捺されていることがある。まだ本格的な集成・分析等はなされていない。

E 字体

- *篆書（それ以前の甲骨文・金石文を含めて）が多いが、草・行・楷や仮名も。
- *「金沢文庫」印を摸倣したためか、長方縦長・双枠の印には楷書が多い。

F 印記（印に書かれている内容）

- *多くは「所蔵者の姓・名・字・号など」＋「蔵書・図書・之印・蔵書印・蔵書記・文庫など」というパターンなので、よく使われる字は覚えておく。
- *読めない場合は篆書の字典、落款印譜、もしくは人名辞典類（『漢文学者総覧』『和学者総覧』など）を参照する。
- *書物を扱うときの注意、寄贈の趣旨、子孫への願いなど、文章を記すものもある。
- *絵入りのものもある。（曲亭馬琴の草庵、内田魯庵の猫、淡島寒月の鴉などが有名だが、装飾として龍や虎をあしらうものも多い）
- *回文印（方印の四文字を左回りに読んでいく印）もあるので注意。

G その他

- *印でなくても、「〇〇常住」「〇〇什物」（寺院に多い言い方）「〇〇所蔵」などと墨書のある場合、識語というよりも蔵書印に準じて扱うべきであろう。
 - *蔵書印は必ずしも所蔵者自身が捺したとは限らない。蔵書の継承者が捺す場合（林羅山の「江雲渭樹」は子の鶯峰が羅山死去後に捺した）、蔵書売り立てなど、その家を離れたり散逸したりする前後にまとめて捺す場合（大野洒竹の「洒竹文庫」、森鷗外の「鷗外蔵書」、九条家の「九條」など）がある。また、本人は死んでも本人所用の印は残っているので、本人とは関係ない書物に妄りに捺されることもある。この場合は、残念ながら蔵書印が年代判定の決め手にならない。
 - *逆に、公家や学者の家で、歴代の蔵書が重層している場合に、それぞれの当主の所用印が異なることがわかれば、その書物の収蔵年代が特定できる。
 - *捺印のことを「鈴（けん）」、印影の数の単位は「顆（か）」と言う。
- 以上をふまえて、たとえば

印記「〇〇／〇〇」（毎冊首右下、朱陽長方双枠、○・○×○・○糧）

などと記します（斜線は改行を示す）。もっともこれは非常に詳しい記述であり、通常、印記のみ、あるいは印記と大きさだけでもよいでしょう。また、形状については「朱陽方」でないもののみについて記す、と決めておいてもよいと思います。

四、参考書（基本的なもの、最近のものを中心に）

- *小野則秋『日本の蔵書印』（『日本蔵書印考』藝文社・1943年の改訂版、臨川書店復刊・1977年）…全般的な解説。図版や印記索引もある。
- *島原泰雄・渡辺守邦『蔵書印提要』（日本書誌学大系 44、青裳堂書店・1985年）…既刊蔵書印譜のデータを網羅した印記集成。
- *渡辺守邦・後藤憲二『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系 79、2001年、増訂版全三冊、同 103、2013～4年）…既刊蔵書印譜を網羅した印影集成。
- *中野三敏『近代蔵書印譜』全五冊（日本書誌学大系 41、1984～2007年）…伝記が不明な人も多かった近代の蔵書家についての略伝と印影。
- *国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印 国立国会図書館所蔵本から』（雄松堂書店・2002年）…同館ホームページでも公開。<http://www.ndl.go.jp/zoshoin/index.html>
- *宮内庁書陵部編『書陵部蔵書印譜』全二冊（図書寮叢刊、明治書院・1996～97年）…前掲書と同様、伝記も詳細、収録人数・機関数も多い。
- *蔵書印データベース（国文研）http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/
- *九大コレクション（九州大学附属図書館）<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja>
- *中国歴代人物印鑑データベース（浙江図書館）<http://diglweb.zjlib.cn:8081/zjtsg/zgjcj/index1.htm>
- *水田紀久『日本篆刻史論考』（日本書誌学大系 43、1985年）
- *落款字典編集委員会編『必携 落款字典』（柏書房・1982年）…主に落款印を集めたものだが、蔵書印も含まれる。この種のもの多数あり。
- *高田忠周『朝陽字鑑精萃』（西東書房・1989年）
- *小林石寿『五体篆書字典』（木耳社・1983年）
- *丘襄二『篆楷字典』（国書刊行会・1976年）…形から引く。

五、蔵書印を利用した古典籍研究

* 同一テキストの伝本研究

古典文学研究の最も基礎的な研究は、ある作品の写本・版本を網羅的に調査し、その系統図を作成し、より正しい本文を確定させることです。作者や成立年代が不明の作品の場合、この作業によってそれがあつた程度絞り込める場合もあります。私の場合、平安時代後期に撰家藤原忠通の命によって編纂された漢詩集『本朝無題詩』の伝本研究を共同で行ったことがあり、その伝本の旧蔵者を主に蔵書印を手がかりにして調査、本文研究と組み合わせることによって、書写の伝播の様子を知ることができました。本書のテキストは大きく二系統に分かれ、最善本は東洋文庫蔵本（脇坂安元旧蔵）と新潟大学図書館佐野文庫蔵本（菊亭家旧蔵）です（後者は日本古典籍総合目録DBにて画像公開）。

平安時代の古典文学作品の多くは、江戸時代初期に出版されていますが、本書は初めて版本になったのが江戸時代後期の『群書類従』に収められた時でした。『群書類従』は明治以降活字化され、文学のみならず日本の前近代文化の研究に大いに貢献しましたが、時代的な制約もあつて、それぞれの作品の最善本を用いているとは限りません。本書も、現存する伝本のなかでは、あまりよくない写本に類似した本文が『群書類従』の底本に使われていることがわかりました。（参考：堀川貴司「近世における『本朝無題詩』の研究と享受」『和漢比較文学』一三、一九九四・七）

* 同一旧蔵者の蔵書の復元

このテーマでよく知られているのが、金澤文庫の蔵書復元です。

鎌倉幕府の実質的な支配者であつた北条氏の一族で、現在の横浜市金沢区に本拠地を置いた金澤氏の文庫は、平安時代以来の貴族文化から生まれた書物と、同時代の中国の出版文化の発達によつてもたらされた宋版本を併せて収集しました。その後の戦乱などで亡んでしまった古いテキストを伝えている写本、本国の中国でも失われてしまった版本を現在に伝えています。しかし、戦国時代・江戸時代に、時の権力者（小田原北条氏、豊臣秀吉・秀次、徳川家康ら）によつて持ち出され、各地に散在しています。明治以降、中央集権国家の成立とともに、書物もまた強力な権力のもとに集積されました。江戸幕府の蔵書を引き継いだ内閣文庫、さらにそこから優れた漢籍を抜き出して移動させた図書寮、すなわち現在の宮内庁書陵部です。そのなかの最善本は現在全て画像で見られるようになりました。ここに金澤文庫旧蔵本が多数含まれています（参照：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧一書誌書影・全文影像データベース—http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php）。

「金澤文庫」という楷書体の長方形の蔵書印は数種類あり、贋物も多いので注意が必要です。（参考：関靖『金澤文庫の研究』講談社、一九五一、関靖・熊原政男『金澤文庫本之研究』青裳堂書店、一九八一）

これに比べればやや見劣りしますが、江戸時代初期、社会の安定にともなつて、知識人や支配層に蔵書家が多く出ました。この時期の蔵書印を持つ書物は、漢籍でいえば明版（みんぱん）以前、和本の写本でいえば江戸初期までの書写、版本でも五山版・古活字版あるいはごく初期の整版であり、いずれにしても貴重書として扱われるべきものです。特に写本においては、書承関係を知ることが重要ですが、この時期の古典の写本は、公家を中心とした王朝以来の文化を継承する家に伝来した純良な本文を伝えるものが多く、信頼できる

本文を持つ可能性が高いのです。ところが、こういった書物を網羅的に収集し現在に伝えている所蔵機関は、ほとんどありません。先ほど述べた紅葉山文庫、尾張徳川家の蓬左文庫くらいでしょうか。これに匹敵する朝廷の蔵書は万治四年（一六六一）の火事で焼失（ただし副本は無事で、これが現在の宮内庁書陵部の蔵書の中核になっています）、幕府の蔵書形成に貢献した儒者林羅山は漢籍中心の大蔵書家でしたが、この蔵書も明暦三年（一六五七）いわゆる明暦の大火で焼失しました。

ほかに、数は少ないながらも良質だったと想像されるのが、脇坂安元（一五八四～一六七三、伊予大洲・信濃飯田藩主、子孫は龍野（兵庫県たつの市）藩主）の蔵書です。歌人であり、林羅山との交友が深かった安元は、和漢全般にわたる蔵書を形成しました。残念ながら死後散逸してしまいましたが、全国各地の図書館・文庫に今も伝えられている旧蔵書が数多くあります。（下図参照）

書名	冊数	所蔵者	請求番号	印色
万葉集	？	國學院大學図書館（画像公開）	貴 2893-2915	藍印
古今和歌集	半1冊	相愛大学図書館春曙文庫	春 598	藍印
堀河百首	？	日本大学総合図書館	？	？
延文百首	大3冊	国文学研究資料館	夕 2-138-1~3	藍印
六百番歌合	大4冊	斯道文庫	092/ト 134/5	藍印
五百番歌合	大1冊	斯道文庫	092/ト 134/5	藍印
公任家集	大1冊	斯道文庫	091/ト 404/1	藍印
鷹百首和歌	？	落合直文旧蔵	？	？
顕昭陳状	？	？	？	？
無名抄	1冊	静嘉堂文庫（松井簡治旧蔵）	502-18	？
源語秘訣	？	？	？	？
仙源抄	大1冊	竜門文庫	二ノ一〇	藍印
埜槌（初版本）	10冊	高木文庫	？	？
文徳天皇実録	大4冊	？	？	朱印
先代旧事本紀	？	天理図書館カ	？	？
古事記	？	？	？	？
新撰姓氏録	大1冊	天理図書館	288.2-イ 1	？
神皇正統記	？	穂久邇文庫	？	？
尊卑分脈	？	前田育徳会尊経閣文庫	？	？
法曹至要抄	？	宮内庁書陵部	457-117	朱印
公事根源	？	宮内庁書陵部	谷・255	藍印
懐風藻	大1冊	静嘉堂文庫	103-16	朱印
文華秀麗集	大1冊	静嘉堂文庫	103-16	朱印
経国集	大1冊	静嘉堂文庫	103-16	朱印
本朝無題詩	大3冊	東洋文庫	三/Fb/24	朱印
三体詩絶句鈔	大6冊	東洋文庫	VII/四/C/1001	朱印

本朝続文粹	大7冊	慶應義塾図書館	1005/287/7	朱印
新撰万葉集	?	無窮会図書館	?	?
新撰万葉集	2冊	国立公文書館内閣文庫		藍印
多識編	?	加賀市立図書館聖藩文庫	経部詩類 28	?
神社考詳節	大1冊	国立公文書館内閣文庫	142-41	朱印
圓悟佛果碧巖録		那須雲巖寺		
(以下、漢籍)				
大学衍義 (古韓本)	?	?	?	?
君臣凶像	大2冊	大谷大学図書館	?	朱印
広韻	5冊	静嘉堂文庫	?	?
広諧史	9冊	国立国会図書館	215-81	朱印
秘書兵衛	欠5冊	(古書目録掲載)	?	朱印
劉氏鴻書	20冊	国立国会図書館	169-31	朱印
鍼灸甲乙經	2冊	大東急記念文庫	54/2/2844	朱印
東坡全集	25冊	国立国会図書館	へ-10	朱印
唐文粹	?冊	国立国会図書館		朱印
楚辭集註	零本1冊	東京帝国大学附属図書館	?	?
明文珠璣	大10冊	京都大学附属図書館谷村文庫	4-02/ミ/1 貴	朱印
詩人玉屑	半8冊	愛知県立大学図書館	921/1-8/280	朱印
草堂詩余	?	三重県立図書館	?	?

*海外所蔵の日本漢籍の調査

近年は海外に出て行った日本の古典籍に注目する研究者が多くなりましたが、和本ではなく、漢籍の場合、通常目録では中国から直接移動したのか、日本を経由して移動したのかがわかりません。蔵書印の記述があれば、かつて日本にいつ頃まであったものかが推測できます。それによって、日本における書物の受容や流通の歴史について新たな知見が得られることになるのです。(参考:『柏克莱加州大学東亜図書館中文古籍善本書志』上海古籍出版社、二〇〇五、住吉朋彦「カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館蔵日本伝来漢籍目録解題初編」『斯道文庫論集』四六、二〇一二・二)

六、おわりに

前章で述べたような調査研究は、それぞれの所蔵機関が蔵書に捺されている蔵書印の情報を、目録等に記述し公開しない限り知り得ません。

西尾市岩瀬文庫はデータベースによってそれを公開しているほか、公家の柳原家の旧蔵書のように、まとめて収蔵されている蔵書群については、その印を集成し、使用者を特定する試みを行っています(企画展図録『公家柳原家の文庫』二〇一八年四月)。他の所蔵機関にたまたま存在する柳原家旧蔵本もこのような情報によってもとの蔵書のなかに位置づけることが可能になります。もっと分散しているものはなおさらです。今後とも、研究者と司書とが協同して、日本の書物文化を深く研究できればと願っています。